

## 「御言葉の種」

2014年08月08日

**マルコによる福音書4章1節9節。**「イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた『「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。』

主イエスの周りには、話をする場所がないほど、民衆が押し寄せた。そこで、舟に乗って湖に少し漕ぎ出し、湖畔に群がる民衆に話された。この時、話されたのは「種蒔き」のたとえである。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔かれた種は、4種類の土壤に落ちた。  
① 道端に落ちた。鳥が来て種は食べられた。  
② 石だらけに土に落ちた。土が浅いので、芽は出したが、日が昇ると根が焼けて、枯れてしまった。  
③ 茨の中に落ちた。茨が伸びて覆い、実を結ばなかった。  
④ 良い土地に落ちた。芽生え、育って、実を結び、30倍、60倍、100倍にもなった。舟の上で語られた主イエスは、種蒔く農夫の姿が目に入り、それを見ながら話されたのではないだろうか。主イエスのたとえは、日常で見られ、身近で使われるものから話されている。この「種蒔き」は、日本の様子とは違っている。日本の種蒔きは、畝を作り、腰をかがめて種を蒔き、その上に土をかぶせる。丁寧で、緻密な種蒔きである。ミレーの「種蒔く人」の絵は、農夫が立って大股に歩いて、種を蒔き散らしている。あの光景が、主イエスの「種蒔き」のたとえの様子に近い。だから、畑以外の、道端や、石地や、茨の中に、種が落ちるのである。

この「種蒔き」のたとえは、弟子たちの質問に答えて、13節～20節で、再度説明している。「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。」種とは御言葉であると言っている。神の御言葉を、どのような土壤で受け止めるのか。① 道端の土壤とは、サタンが来て、蒔かれた御言葉が奪い取られる。道端だから、常識的で物の流れに目をうばわれる人ではないだろうか。② 石だらけの土壤とは、御言葉を喜んで受け入れるが、根が育たないので、艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。石地だから、頑固で、自分を壊せない人ではないだろうか。③ 茨の土壤とは、この世の思い煩いや富の誘惑や、その他いろいろな欲望が、御言葉を覆いふさいでしまう。茨の地は、欲望に翻弄される人であろう。④ 良い土壤とは、御言葉を聞いて受け入れ、豊かに実を結ばせる人である。

あなた方は、どの土壤で御言葉を受け止めていますかという問いかけに、真面目なクリスチャンは「私は ① だ、② だ、③ だ」と答える。謙遜もいいだろうが、御言葉には確かな「命」があり、その命が荒れた土壤を豊かな良い土壤に変えてくださるという信仰でよいのではないか。ただし、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言っているように、御言葉の種は小さく聞き難いものであることは、心して知っておきたいと思う。